

越後駒ヶ岳

銀山平より

1991年4月28日

メンバー：L. 岡坂準一、白沢光代
手塚紀恵子

前日午後、岡坂さんの車で東京を発って、その夜のうちに銀山平に到着する。石抱橋の所に釣りの監視所がありその玄関先に幕営。水道も使わせていただく。

28日(快晴)北ノ又川に沿って霧がたちこめ、駒、中ノ岳のたおやかな稜線が、周囲を取り囲んで近い。残雪も厚く天気も上々、今日は山頂を踏めそうだ。石抱橋からシールを付け、北ノ又川沿いの林道を進む。林道といっても、雪に覆われていて、雪原とかわらない。左手に荒沢岳が姿を見せる。山容の険しいこの山は、雪の付きも悪く黒々としている。柳沢と出会う所で尾根に取り付くのだが、赤布も付いている。尾根の取り付きは急登で、スキーはひっばる。尾根をしばらく行くと、雪の消えた所が出てきて、藪こぎとなる。スキーは担いで、密な灌木帯を乗り越え、もがききり、出だしからすっかり疲労困憊してしまう。こんなペースじゃ山頂は無理なんじゃないか、と暗い気持ちになる頃、明るい笑い声が…。見ると、隣の尾根を別パーティが足取りも軽くルンルンと歩いている。何と、隣の尾根に夏道が付いていたのだ。よかった！彼らの登っている尾根と合流する所まで行けば、藪こぎからは解放される。これに懲りて、今度からは夏道の様子などもしっかりと調べてこようと、謙虚に反省する。夏道は大体现われていて、スキーを担いで行くのは辛い、藪こぎとは比べようもな

い。標高1200M辺りであろう全面雪となり、シールが使える。道行山では例のルンルンパーティが例の明るい笑い声をたてていた。藪こぎなしで私達よりかなり早く着いたようだ。道行山からはなだらかな尾根が続き、駒ノ湯からの尾根と合流すると、トレースもはっきりしてきて、登山者もけっこう見かけるようになる。もっとも、そろそろ下山にかかる時間帯で、登りの人には出合わないが。スキーを使っているのは、単独行者が2人だけ、と少ない。尾根は次第に傾斜を増し、にせ駒と呼ばれるピークに立つと、山頂はすぐそこで、駒ノ小屋のおじさんが手を振っている。小屋直下の急斜面はつば足にかえるが、岡坂さんはシールでがんばる。ようやく山頂に着いたのは2時近く、何と7時間を越える登りになってしまっていたのだ。山頂に若干名いた登山者も下山し、どうやら私達が今日最後の登頂者になったようだ。晴天は相変わらずで、山肌に残雪のはだれ模様を着けた山々が、あれこれ賑やかに見えている。もっとゆっくり憩っていたかったが、今日中に帰りたい私達、疲れた体に鞭打ってスキーを付ける。でも「滑れば元気が回復する」という岡坂さん言葉通り、滑り始めてしまえばどうってことなかった。重たいザラメ雪でスピードは出ないが苦もなく高度を落としていく。特に山頂からしばらくは、急降下で楽しめる。登りは抗重力の運動だが、滑りは重力任せで、逆らわないのが疲れのないためのコツなのは、どんな世界でも一緒だ。やがて、傾斜はゆるくなるものの、道行山手前の鞍部まで一気に滑れる。尾根通しながら、回転するスペースもあり展望もよくて爽快なコースだ。道行山へはシールでゆるく登り返す。山頂から再び滑れるが、尾根伝いに行けば、

すぐ夏道になって、スキーを担いで歩かなければならない。雪があるうちに尾根を離れて、柳沢に滑り込もうということになる。適当な斜面を探しながら尾根の柳沢寄りを滑り、沢状の所を滑って柳沢に下りた。急斜面ながら岡坂さんの好判断でスムーズに下りられ、ほっとした。柳沢もすっかり雪に覆われ、後はゆつたりと出合いまで滑っていけばよい。出合いで朝辿った林道に合流し、シールを付けて後1時間のがんばりだ。石抱橋に戻ったのが午後5時で、帰路は、結局スキーでずっと滑れたために、予想よりずっと早く戻ってこられ、運転手さんには酷だったが、何とか無理してその日のうちに帰京した。

タイム：石抱橋6:38 — 柳沢橋7:30
 — 道行山10:10 — 小倉山11:00
 — 越後駒ヶ岳13:55/14:20 — 道行山15:30 — 柳沢 900M16:00 — 柳沢橋16:10 — 石抱橋17:05

(手塚 記)

